と也、今草の庵を愛するも科とす、閑寂に著するも障なるべし、いかゞ用なきたのしみをのべて、むなしくあたら時を過さむ、ゑづかなる曉、此ことわりをおもひつゞけてみづからこゝろにとひていはく、世をのがれて、山林にまじはるは、心をおさめて、道を行はむが爲なり、ゑかるを姿はひじりに似て、心はにごりに玄めり、すみかは則淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃持が行にだも及ばず、若是貧賤の報のみづから惱ますか、將又志心の至りてくるはせるか、其時心更に答ふる事なし、たゞかたはらに、舌根をやとひて、不淸の念佛兩三度を申してやみぬ、時に建曆の二とせ彌生の晦日比、桑門蓮胤外山の庵にしてこれをしるす、

月かげは入山の端もつらかりきたへぬひかりをみるよしもがな

〔十訓抄十〕近比鴨社の氏人に南大夫長明と云者有けり、和歌絃管の道、人に知れたりけり、社司を望みけるが不叶ければ、代を恨て出家して後、○中略

如本、和歌所の寄人にて候べき由を、後鳥羽院より仰られければ、

沈みにき今さらわかの浦波によせばやよらむあまのすて舟、と申して、終に籠居してやみにけり、世をも人をも恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ、

〔撰集抄一〕依祇園御託有男發心事

過にし比、九重の外、白川の邊に、形計なる庵結て、深く後世のいとなみする人侍り、この人親の處分をゆへなく人に押とられて、詮かたなく侍りけるまゝに、祇園に七日こもりて、ことわり給へと祈り申侍けるに、七日と申に曉、御殿の御手をひらかれて、やゝと仰られければ、大明神の御託宣にこそとおもひて、いそぎおきなほり、畏りて侍るに、氣高き御聲して、

長きよのくるしき事をおもへかしかりの宿りを何なげくらむ、と御託宣なりぬと思て、打おどろきぬ、此御歌につきて、つくゞく案ずるやう、げにもあだにはかなきは此世なり、よひに見し